

# 高齢期におけるイヌとの生活：主観的幸福感と求められる飼育支援サービス

高齢者のイヌ飼育は心身の健康に大きく寄与するが、「将来の飼育継続への不安」が最大の壁。統計的な幸福度の有意差は出なかったものの、「安心できる飼育支援サービス（一時保護や同伴入居）」の拡充が、超高齢社会における相互のQOL向上に不可欠である。

## イヌがもたらす恩恵と飼育の障壁（事前調査より）

### 🐕 ドッグセラピーの劇的効果

イヌが苦手な高齢者でも「触りたい」「話しかけたい」と自発行動を起こすなど、セラピー前後の行動変化が極めて大きい。

### 最大の障壁： 「自身が高齢・困難に なった際の不安」

サービスや制度が確立されていれば安心して飼育できるという切実な声が多数。



#### 身体的健康

日々の散歩を通じた健康維持。



#### 精神的健康

家族の一員としての存在感、生活の活力（ペットロス対策での多頭飼育含む）。



#### 社会的健康

保護犬の引き取りを通じた、社会との相互補完的な関係構築。

## 飼育の希望と「主観的幸福感」の関係（本調査）

対象：イヌに興味がある男女 / 尺度：日本版主観的幸福感尺度（7段階） / 手法：対応のない検定（5%水準）

【仮説1】「何歳まで飼育できるか考えたことがある」vs「ない」	✗ 有意差なし
【仮説2】飼育サービスがあればイヌとの生活を「望む」vs「望まない」	✗ 有意差なし
【仮説3】飼育サービスがなくてもイヌとの生活を「望む」vs「望まない」	✗ 有意差なし

💡 注目：統計的有意差はないが、この群の「主観的幸福感」の得点が比較的高かった。

### 【考察】

サービスに依存せず「それでもイヌと暮らしたい」と望む層は、根本的に主観的幸福感が高い可能性が示唆された。

## 求められる飼育支援サービスと今後のニーズ



### 【社会実装の急務】

高齢者の幸福感を支える「イヌとの生活」を守るためには、「飼えなくなった時のセーフティネット（一時保護・譲渡支援）」と「共に生きるためのインフラ（同伴施設）」の確立が不可欠である。